

報道が沈黙することによる被害
被害者が声を上げにくい状態を作っている社会
(以下は緊急シンポジウムの抜粋です)

進行役：勝村久司さん：

やまゆり園、精神医療、子宮頸がんワクチンの被害、どの問題も、私の妻と娘が被害にあった陣痛促進剤と似ている構造があると思います。皆さんの意見を共有していくタイムキーパーをつとめさせていただきます。感じておられる点をお一人3、4分でまずお願いします。

◆◇やまゆり園の支援の実態を暴くこと自体が、タブー視されていた◆

渡辺一史さん（ノンフィクションライター）：

「こんな夜更けにバナナかよ」という本を20年近く前出しまして、最近映画化されました。2016年に起こった相模原障害者殺傷事件は、1月に初公判があって3月に判決が出まして、植松聖被告、今は死刑囚になりました。事件の報道は、やまゆり園という施設が「被害者」ということで、メディアはやまゆり園の内部で実際どんなことが行われていたかにスポットを当てることに大きなためらいがあった、と思うんです。

ところが、裁判の過程でもポロポロと出て来たと思うんですけれども、実は植松死刑囚はやまゆり園に勤め始めた当初は利用者のことを「可愛い」と思っていたり、それなりに情熱を持って仕事をしていたのが、3年2ヶ月やまゆり園に勤めるうちに「目の前にいるこの人達には生きる意味はないのではないか」と思い始めた。そのきっかけが、彼が目にしてきたやまゆり園の実態にあったのではないかと、最近深く探られ始められてきました。

神奈川県黒岩知事も第三者の検証委員会を作って検証を始め、身体拘束がかなりあったとか居室の施設の実態とかが明らかになってきた。ただ、これもまた報じるメディアと報じないメディアがいろいろありまして。

上東さんが毎日新聞のデジタル版に大変素晴らしい記事を連載していましたよね。私も「創」という雑誌に、きょうも参加しておられる、平野和己さんのお父さん、平野康史さん～最初からやまゆり園の支援の実態を告発していた方～、検証に当たった元毎日新聞の論説委員の野澤和弘さんなどを招いた座談会をしたり（注①）、雑誌に書いたりしています。

「やまゆり園は被害者だ」と、やまゆり園の支援の実態を暴くこと自体がタブー視されていたという面があるんです。それはなぜなのか、も含めて上東さんに引き継ぎたいと思います。

◆◇「やまゆり園は被害者」？「福祉は善」？

殺されれば騒ぐが、社会隔絶されていることには無関心なメディア◆

上東麻子さん（毎日新聞・デジタル取材センター）

9月に入ってから「やまゆり園事件は終わったのか」という連載をやっています注②。福祉の視点から事件を問い直す、というものです。私は生活報道部の記者で事件記者ではないので、障害者の暮らしという観点から取材をしていました。

事件当初から、植松個人の特異性ばかりが強調されがちな報道に違和感を感じていました。やまゆり園の支援現場に問題があった、という話は早い時期から福祉関係者の間でありました。障害のある人達が集団でああいう遠い都会から離れた場所で暮らしている、ということが制度的な問題だと感じていて、そうしたことを地道に取材してきました。

今回は園でどんな支援が行われていたのか、園長とか理事長とか職員の方とか同じ共同会の中で働いている方とか、匿名で取材に応じる方が多いんですけどもそこでの支援がどういうものであったのか、というのを取材して書いています。渡辺さんがおっしゃったように、うちの紙の方の新聞も含めて大枠では「やまゆり園は被害者」、そして「福祉というは善だ」、という前提で位置づけられています。

でも、福祉の支援現場に目を凝らすといろいろな問題が起きている訳です。他のメディアはどういうわけか取り上げない。私は東京本社の記者なので神奈川でのしがらみがないのがいいのかな、と思っていますけれども。

一つ感じているのは、障害者が殺されれば騒ぎますけれども、社会から隔絶された遠い場所にたくさん集団で暮らすことをさせていてそこで虐待まがいの対応をされている、そういうことには無関心なんです。

事件の後「被害者も同じ人間だ」ということがメディアで叫ばれましたけれども、取材する側もそうした普通以下の暮らしをする、ということに対しては「障害者だから仕方がない」というふうに思っているのではないかな。そこに本当の問題の深い根っこがある、と感じています。

事件は植松個人が起こしたものですけれども、やまゆり園を運営している法人、そして不適切な支援を長年見逃してきた神奈川県、それから地域移行という政策を掲げながら障害者の地域生活を保障できていない国自体、あとはそういったものに無関心であり続ける社会そのものにも責任がある、と思っています。私は優生保護法の取材にも関わっていたんですけれども、福祉関係者だったり国だったり、いろんな人がいろんなふうに障害者を追い込んでいく、そうした構図というのがやまゆり園の問題と重なっている。そういった時もメディアは長年、目を向けてこなかったんです。だから報道しないということは人権侵害に加担しているのと同じだ、と私は思っているので自戒を込めてこの事件の深いところにあるような問題を解きほぐしていきたいな、と思っています。

----同じ様に問題が大きすぎてタブー化されているかもしれない精神医療の問題について市川さんの方からお願いします。

◆◇神出病院の酷い虐待、5年以上前から「皆やっていたんです」◆

市川亨さん(共同通信大阪本社デスク)

私は10年ほど社会保障、厚生労働省の担当をやっていて障害福祉とか医療とか介護の問題を他のこともやりつつ取材をしています。今は大阪にいまして。今年、神出(かんで)病院というところで酷い虐待が行われていた、ということで当時は現職看護師ら6人が逮捕された事件があって。

私は精神科病院に体験入院して記事を書いたりしたことがあります。その時は率直にどうしてこの人達はここにいないか、という人達がたくさんいた、という経験をしました。少し変だけどこの人達は別に社会にいても全然問題ないんじゃないか、という人達がいたことが原体験としてあって。

神出病院の事件の公判を聴きに行くと酷い虐待が行われていたということは分かってた訳ですけれども、5年以上前から若い看護師達が「就職したときにはもう皆やっていました」と「私が入ったときには皆やっていたんです」と。

新人の看護師がそういう状態に置かれたらやっぱり感覚が麻痺してしまうだろうし、彼らだけを責めることはできない。それでは病院はどうだったのかというと、そもそも精神科医療の構造的な問題がある訳ですけれども。ずっと前から行われていた、ということを経験して聞いてこれは記事にしなければならぬだろう、と思ったんですけれども他のところはそこはあまり取り上げてい

なくて。先日それを記事にした訳なんです。注③

個人としても精神科病院の問題というのは10年ぐらい前からなんとかしたい、
とって取り組んでいます。

----子宮頸がんワクチンで、酒井さんは入院中ですがけれどもお願いします

◆◆◆体験を語って助けを求め、

このことが加害行為であるかのようにバッシングされる苦しさ

酒井七海さん(HPV ワクチンの副作用の被害者)

今は大学院の修士課程に所属していて専攻は社会福祉学でその中の難病政策や
障害学を研究しています。

自分が健常者として高校生まで生きてきて、ワクチンを接種したことで病気を
発症してそれが重症化していった障害者となって、その後障害のある学生とし
て生きていく、という中で私が今感じていることは薬害の被害者として生きて
いくということにはいくつかの困難が重層的に重なっている、ということです。
まず一つは障害者、難病患者として生きていくことの生きづらさ、自分の必要
な十分な支援を受けるということは自分に障害があるほど、あるいは治療が難
しい難病であるほど難しいかな、と感じます。

そこにプラスして認められない病、論争中の病として生きていくこと。これは
社会から理解されない、あるいは医療機関や福祉や行政等から理解してもらえ
ないことで生きていくハードルが上がる。ここは私が自分が今研究している領
域でも議論されてきていることだと思うんですけども、そこにプラスして自
分には生きていくことを難しくしているものがある、と最近感じています。

それは自分の体験を語って助けを求め、このことがあたかも加害行為である
かのようにバッシングされることがある。

具体的にいうと、私達が声を上げることは予防接種の接種率を低下させて未来
の患者が増える、それで亡くなる人が増えるかもしれない。というふうに私達
の現状を語ることで誰かの利益を損害させるような行為であるかのように言わ
れる。このことが私達にとって一番苦しいことです。

実際に今日の前にある症状や障害、これと一緒に生きていくことは大変なんで
すけれども、これは先程海老原さんがおっしゃっていたように自分の考え方で
あったり生きていく工夫であったりコツであったり経験であったり乗り越え

てきたものが私自身にもたくさんあります。

でも、最後の自分の経験を語ることが誰かにとってよくないかもしれない、と思わされることはすごく苦しいことで本当にこのまま自分の活動を続けていてもいいのか、助けを求めていてもいいのか、ということで不安になることが正直あります。

その中で自分にとっては何にエンパワーメントされるのかな、と考えたときに「声を上げてもいいんだ」と思える環境を整えてもらうこと、そしてその声を拾い上げてもらえることなのかな、と思っています。

マスコミで長く伝えてくださっている方もいらっしゃるんですけども、報道されることでそれでバッシングされる声とかも目にすることがありまして。この状況の中で、私はある意味それを受け入れてこういう場に出て来ているんですけども、もっと多くの人が声を上げていかないとこの問題は認められていかない、その一歩を踏み出せる人達が増えていくためにはどうしたらいいのか、と考えたときにサポートしてもらえる環境をこれから作っていきたいと思うし作って行って欲しいな、と思っています。

◆◆◆裁判で被害者側が勝った瞬間に、

突然、さも昔から味方だったように味方のように報道の嵐になる

隈本邦彦さん(元NHK記者。江戸川大学メディア論教授)

今、酒井さんが語ったこと、本当に切実です。

2013年頃に全てのメディアがああ被害、特殊な、おそらく自己免疫性の脳炎と考えられるあのワクチン特有の副反応について報道しました。繰り返し報道した後パタッと報道しなくなり、今や報道するかどうかは、とある新聞では報道するかどうかは局長マターで現場のデスクでは判断できない、例えば被害者の人が勉強会を開いた、学習会を開いた、ということも報道しようにも、それをやると必ずワクチンの推進派の人達から「そういうありもしない副作用を報道するのはいかなものか。非科学的な報道を止めろ。」と言われる現状があるんです。しかも副作用を言えば言うだけ「因果関係がはっきり証明されていない非科学的な、非医学的なことを被害者が言って反ワクチン運動をやっている」というふうにレッテルを貼られる。

そして、「ワクチンの接種率を下げる」と言って攻撃する。直接 SNS、ツイッ

ターやフェイスブックでバッシングされているのが現実です。だからこういう現実を本当はメディアは本来なら被害があるんだったら被害をそのまま報道して、その科学的根拠についてもワクチン推進派の言っていることをしっかりチェックする、という姿勢であるべきなのにその姿勢を全部放棄して「これは報道しない」と決めてしまっています。

おそらく裁判で決着が付いて原告側が勝った瞬間に、突然味方のように報道の嵐になるはずなんです。それは過去の薬害、スモンでもサリドマイドでも薬害エイズでさえもそうでした。

結論が出るまではずっと知らんぷりをして結論が出た瞬間に、さも昔から味方だったように報道するのがメディアの多くの若い記者達の有りようです。我々は裁判で勝って必ず真の救済と治療法の開発を国に約束させるつもりなんです。が、それまでの間メディアが黙っているとこんなことが起こっています。

2013年に副反応の関係で積極的勧奨は中止になりましたがその4年後2017年に目の前のお医者さんから「本当はいいワクチンなのにメディアが馬鹿だから変なことを報道しているよね。」と言って、その説得に応じて接種をした人で今、被害者の会の連絡会に入っていらっしゃる方がいます。注④

酒井七海さんと全く同じ症状です。まず、全身の痛みや酷い頭痛、そして運動障害、認知障害、そして神経障害、眩しすぎるとか匂いがきつすぎるとか全部共通した症状になっている人が、メディアが全く黙っているから起きているんです。

その被害者の方が言うには2013年頃には怖くて注射をしなかったけれどその妹さんの時には全然報道もされないし、安全だ、というふうにお医者さん達も言っているから大丈夫かな、と思って接種したと言うんです。

これは報道被害です。報道が沈黙することによる被害。これは被害者が声を上げにくい状態を作っている社会もそうだしそれに手を貸している、知らんぷりをしているメディアが加害をしている、と感じています。恥ずかしながら私も昔メディアにいて、今は大学の教員ですけれども、現役時代にそういうことをやっていたのではないかと自己反省をしています。ぜひ若い人達にも分かって欲しいと思います。

----やまゆり園にしても精神医療にしても、個人的な倫理の問題ではない。純粹に仕事をしようとしていた人がだんだんおかしくなっていくってしまう。そう

いう社会の価値観の問題があるとしたら、被害者が被害を訴える勇気を出そうとしてもそれを止めるような社会であつたら、ジャーナリストの人がこれは社会に伝えて変えていかなければならないと思つても、そういうジャーナリストの姿勢にさえ社会がそうしていくような世界があることに目をむけていかなければ。じかんきようですのでここまでに。